



1987年山口大学医学部卒業。豪セントビンセント病院留学、米メイヨークリニック留学、山口大学医学部臨床教授などを経て、2019年から現職。

山口県北部の中核病院として、14診療科305床を有する長門総合病院。急性期から緩和ケアまで地域に密着した医療を実践。2021年には新病棟も完成した。就任から3年となる村松慶一院長はどう病院を経営しているのか。

—職員に伝えてきたことは。

収益に関する話をすることはなく、医療人の心得や意識改革について、話をすることが多いですね。それが、院長の役割だと思っています。

医療機関で働いていると、「慣れ」から、命の尊さや病

院が何をするとところなのかといった原点への意識が薄れがちです。病院は、病いやけがを治すところであると同時に、命の最後の停車場でもある。預けていただいた命にどう関わり、ご本人やご家族に私たちがどう接したのか、常に振り返りましよう、と話しています。

また、病院はオーケストラのようなものだということも伝えていきます。院長が指揮者を務め、医師、看護師、事務や清掃などあらゆるパートがプロとして力を発揮する。どこかのパートがプロとしての役割を果たさなかったら、病院として

駄目になるということも折に触れて話すようにしています。

職員の意識が変われば、経営も良くなるものだと思いますし、実際、上向きに変化しています。新病棟の完成後、職員が心機一転頑張ってくれたこともあり、患者が増え、手術件数が5年前の約5倍になるなど、病院として大きく生まれ変わろうとしています。

—取り組みと成果を。

就任時、武将・毛利元就の3本の矢に例えて、三つの目標を立てました。第1に医療者を増やすこ

医療人としての原点を大切に

各職種が責務を果たす

山口県厚生農業協同組合連合会
長門総合病院

むらまつ けいいち
村松慶一 院長

と。長門市は県内でも過疎化が進み、医師や医療スタッフが少ない地域でした。私自身の山口大学とのパイプと、県の緊急医師確保対策枠という二つを活用した結果、医師は22人から31人に増加。看護師は、看護部長と共に県内の大学の看護学部や看護学校を回ってPRを行い、若手を採用することができました。

第2に、当院がカバーする医療圏の拡大を試みました。例えば、近隣市の市長らに「救急などで支援する」と伝えるなどし、人口約3万2000人の長門医療圏の範囲を越えて、現在は周辺地域を含めた10万人程度の医療をカバーしています。

第3は、教育機関としての確立です。学会発表時の経費を援助し、英語の論文を書くよう促してきました。勉強することが患者さんのためであり、今までの教科書通りに患者さんを診ているだけでは、今、治療できない患者さんは、この先も治らないままです。英語で論文を書くことは、世界の医療者、研究者とつながることもできます。

現在、多くの職種で、勉強し、論文を書く姿が見られます。当院は、外国医師の臨床修練病院の指定を受けていて、現在は整形外科にフィリピン人の医師が在籍しています。日本の若手医師に限らず、国際的にも学びの場となっています。

—今後は。

就任時、「長門市のメイヨークリニックになろう」と言いました。同クリニックは米国のミネソタ州ロチェスター市といういわゆる田舎にありながら、世界的な病院。良い病院というのは、どんな地方にあっても患者さんや医療者が集まります。大きな夢と言われますが、「できないことはない」と思っています。

コロナ禍では、感染症指定医療機関として県の要請に従って患者さんを受け入れ、通常8床の感染症病床を一時は30床に拡大。感染制御チームや病棟の看護師の奮闘で、何とか乗り切ってきました。「Agathering stone」という言葉のように、厳しい時期でも立ち止まらず、常に進み続ける病院でありたいと思います。



山口県厚生農業協同組合連合会
長門総合病院
山口県長門市東深川85
☎0837-22-2220 (代表)
<https://www.nagato-hp.jp/>